開催報告　第13回日本医療マネジメント学会学術総会

第13回日本医療マネジメント学会学術総会
会長　香川恵造
（市立福知山市民病院院長）

香川会長　挨拶

2011年6月24日（金）、25日（土）の両日、京都市勧業館みやこめっせ・京都会館において第13回日本医療マネジメント学会学術総会を開催させていただきました。

今回の開催におきましては、演題申込み締切直後の3月11日に東日本大震災が発災し、多くの方が被災されました。当初、学会を開催しえるのかと大変危惧いたしました。しかし、このような時こそ、質の高い医療を提供するための議論の場である本学会を開催し、会員相互の研鑽に努めることが重要であると考え、開催に至った次第です。会期を通じ、参加人数は4,710名（事前登録：2,658名、当日登録：2,052名）と多くの方にお越しいただきました。御参加いただきました皆様に感謝申し上げますとともに、被災地の一日も早い復旧・復興をお祈りする次第です。

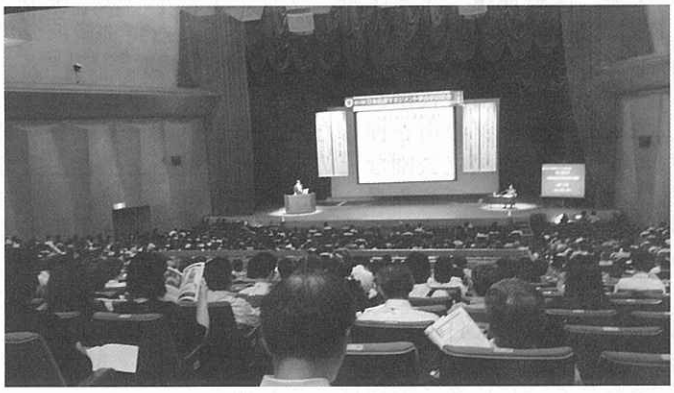
さて京都での本学会の開催は、2度目になります。京都は、伝統・文化を守り伝えていくとともに、変革すべきものは変革するという進取の気性に富んだ町であります。この営みこそマネジメントの本質に相通ずるものがあります。その京都を舞台に、地方の自治体病院の院長が会長を務める今回の学会では、「地域で守る患者中心の医療－チーム医療と医療連携」をメインテーマに掲げ、それに沿ったプログラムを組ませていただきました。

御応募をいただきました演題につきましては、査読委員による審査を経て、一般演題1,014題、クリティカルパス54題、合計1,068題を採用させていただきました。カテゴリー別では医療安全、地域医療連携、医療の質の順に多く、今日の課題を反映したものでした。御希望に添えずポスターに回っていただいた演題もありましたが、これまでにない多数の応募をいただき、御礼申し上げます。

1日目の招待講演は、諏訪中央病院名誉院長　鎌田 實先生に「言葉で治療する－医療と信頼とあたたかさの関係」というテーマで御講演いただきました。鎌田先生は日本チェルノブイリ連帯基金を設立され世界的に御活躍されており、その豊富な経験に基づく医療者と患者さん、人と人との関わりについてのお話は、感動的で心に強く響くものでした。2日目の服飾評論家　市田 ひろみ先生の御講演は、知性溢れる味わい深いお話でした。伝統を守り抜く力、絶妙な間の取り方、心遣いなど、源氏物語の時代から現代に至るまでの京の人々の知恵に満ちた暮らしの一端を拝聴することができ、感銘深いものでした。

特別講演では、厚生労働省保険局医療課　迫井正深先生から「医療制度を取り巻く現状と課題」のタイトルで、医療制度の今後の方向性をわかりやすくお示しいただきました。また、近森病院院長　近森正幸先生の御講演「多数精鋭のスタッフによるチーム医療の実践」からは、チームで医療サービスを提供することの重要性を再認識させる内容であり、多くのヒントを得ることができました。

教育講演では、ICT・NST・緩和ケアチームの役割と現状について、わかりやすく内容のある御講演をしていただきました。教育セミナーや12のシンポジウムを通じ、クリティカルパスをはじめ、医療安全、地域連携、医療コンフリクトマネジメント、病院物流とSPD、DPCなど多岐にわたる領域で活発な議論が展開されました。医療システムの骨格を支えるITの推進についてのシンポジウムは、ITの今日的問題から医療の未来を展望できる大変有意義なものでした。今回は、医薬・薬薬連携、医療機器の安全管理など新しい領域においてもシンポジウムを企画しましたが、大変好評でありました。また、チーム医療の困難性が指摘さ


特別講演　会場風景